九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Grace in American Puritanism : Its Self-Assurance and Insecurity

Ogura Izumi
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/1355855

出版情報：英語英文学論叢. 44, pp.1-17, 1994-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ピューリタニズムにおける grace

—— その self-assurance と insecurity ——

小倉いずみ

ピューリタニズム研究は絵画の透視画法における「消点」(vanishing point)にたとえられる。[1] 絵画の構図の中ですべての要素が一つに収斂する時,遠くにいる我々はその全体像と地平線に消えゆく点を見るが,そのvanishing pointを自分の手で捕えることはできない。また焦点の当て方も学者により異なる。1930年代に Perry Miller により開拓された植民地時代研究は, 1960年代にEdmund Morgan や John Demos が社会史や家族史に, Bernard Bailyn が政治哲学に拡大した。[2] 1970年代になると, Larzer Ziff は *Puritanism in America* (1973) において社会・経済・文学的観点から研究を深め, Sacvan Bercovitch はアメリカのイデオロギーの源泉を *The Puritan Origins of the American Self* (1975) に著した。

1980年代のピューリタニズム研究は1982年の *American Quarterly* で特集されたPerry Millerの *The New England Mind* [3] の再評価から始まる。そのspecial editor の James Hoopes は, *NEM* を"Art as History"と呼び, Perry Millerの研究を高く評価した。[4] 本稿は *NEM : SC* と *Errand into the Wilderness* (1953) をベースにして80年代のピューリタニズムの中で新しい主題である

---

1) Andrew Delbanco, "The Puritan Errand Re-Viewed," *Journal of American Studies* 18 (1984), 3, p. 344.

2) Edmund Morgan, *The Puritan Family* (N.Y.: Harper Torchbook, 1966); John Demos, *A Little Commonwealth : Family Life in Plymouth* (N.Y.: Oxford Univ. Press, 1970); Kenneth A. Lockridge, *A New England Town: The First Hundred Years* (N.Y.: Norton, 1970); Bernard Bailyn, *Ideological Origins of American Revolution* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1967).

3) 二巻から成る。Perry Miller, *The New England Mind: The Seventeenth Century* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1939) 以後 *NEM: SC* と略す; *The New England Mind: From Colony to Province* (1953).

4) James Hoopes, "Art as History: Perry Miller's *New England Mind*," *American Quarterly* 34 (Spring, 1982), pp. 3-25.

初期のピューリタンが感じた不安感を考察する。これは Philip F.Gura が "a profound insecurity about their place"[5] と呼ぶ心情であり，grace に関して saints が抱いた心理的な anxiety とピューリタンが体験した新世界への不安の両方を指すものである。Miller は"Errand into the Wilderness"の序文で，Samuel Danforth (1627-1674) の説教は wilderness よりも errand に解釈の強調点が置かれていると述べているが，[6] 本稿はこの errand の意味を手がかりとして，マサチューセッツ湾植民地の共同体建設の核となり，ピューリタニズムを特徴づける covenant of grace について検討する。

I

Miller は "Errand into the Wilderness" の中で，"errand"の持つ言葉の ambiguity に注目する。一つは"actual business"[7] と Miller が呼ぶ「自分の目的として」ピューリタンの共同体社会を建設するという理想である。しかし他方で，errand は地位が高い者のために「使い走り」をすること，つまり神の"errand boy"として神の「任務」を果たすことを意味する。Miller はマサチューセッツ湾植民地を"an organized task force"[8] と呼び，第一世代のピューリタンは神の任務を実行する errand boy としてのアメリカの使命に失敗し，英国の audience をつなぎ止めておけなかったと主張する。1660年代のピューリタニズムの declension の象徴として Danforth が暗示した errand，すなわち Miller の understatement であった redemptive America を大きく取り上げたのは Bercovitch の *The Puritan Origins* である。Bercovitch は Cotton Mather (1663-1728) の *Magnalia Christi Americana* (1702) の中の Winthrop 伝を取り上げ，イスラエルの城壁の修理を呼びかけ共同体建設に尽力した預言者 Nehemia になぞらえて，Winthrop を「アメリカのネヘミア」"Nehemias

5) Philip F. Gura, "The Weight of Elijah's Mantle: A New Anthology of American Puritan Writings," *Early American Literature* 20:2 (Fall, 1985), p. 159.
6) Perry Miller, "Errand into the Wilderaturess," *Errand into the Wilderness* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1956) p. 1.
7) *Ibid.*, p. 3.
8) *Ibid.*, p. 11.

Americanus"と呼ぶ。[9] アメリカ人の identity をピューリタニズムに求め，世界の harbinger としての"The Myth of America"を強調した Bercovitch は80年代前半のイデオロギー的ピューリタニズム解釈の主流である。

しかし Bercovitch の imperious とも言える自信に満ちたアメリカ人の使命感に対して，Andrew Delbanco は"The Puritan Errand Re-Viewed" (1984) の中で，Bercovitch とは正反対の"diffident"で"defensive"なピューリタン像を提起する。新世界の loneliness や nervousness を取り上げた Delbanco は，ピューリタニズムを fervor というよりも"elegy"として，American self の観点よりも"fragility"を示すものとして解釈する代表的な批評家である。そしてピューリタンの鋭い self-consciousness は必ずしも self-confidence を意味するものではないと主張する。Delbanco は1660年代の jeremiad や declension の観点から第一世代の偉大さを仮定する危険性を指摘し，Bercovitch や Miller のような批評家が解釈するがゆえに，植民地時代の第二・第三世代の「拡大鏡」を通して第一世代の理想像を見ているのではないかと警告する。

このようにして1980年代後半のピューリタニズム研究は，焦点を第一世代の1630年代へと移す。その論争の中心となったのは1630年の Great Migration で移住した人々の移住の動機を研究した *The New England Quarterly* の Virginia DeJohn Anderson の論文である。[10] Anderson は1630年代の Great Migration で移住した７隻693人の職業・年齢・家族構成を分析し，入植後の財政状況や土地分割の方法を解説する。Anderson は移住者の経済的レベルが高く，家族単位の移住が多いことに注目し，彼らは宗教的理由で移住したと結論づける。しかし，David Grayson Allen は比較的豊かであったことは宗教的な移住とは必ずしもつながらないと反論する。[11] Allen の理論をさらに急進的に展開し，Miller に挑戦したのは Theodore Dwight Bozeman である。Bozeman

---

9) Sacvan Bercovitch, *The Puritan Origins of the American Self* (New Haven: Yale Univ. Press, 1975), Chapter I, pp. 1-34. Bercovitch が根拠とした *Arbella* sermon の中での「ネヘミア」への言及は、John Winthrop, *A Model of Christian Charity* (1630) in Alan Heimert and Andrew Delbanco ed., *The Puritans in America: A Narrative Anthology* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1985), p. 85.

10) Virginia DeJohn Anderson, "Migrants and Motives: Religion and the Settlement of New England, 1630-1640," *The New England Quarterly* 58 (September, 1985), pp. 339-383.

11) David Grayson Allen, "The Matrix of Motivation," *The New England Quarterly* 59 (September, 1986), pp. 408-418.

はMillerに代表される宗教的"model"や"beacon"としてのニューイングランドは不正確で誇張した解釈にすぎず,以後の研究をMillerの受け売りにしてしまったと言う。

> Before Miller's exposition, the idea of an exemplary Puritan mission was unknown.... The rapid adoption of the "errand" thesis by subsequent students of early America thus marks a notable watershed in recent scholarship. Yet, as Sacvan Bercovitch has observed, Miller's essay has "become influential in the wrong way." Its eloquent argument has provoked passive acceptance rather than reexamination of the documentary basis.[12]

Bozemanは第一世代の人々は「自分たちの」教会改革のために移住した——Millerのerrand解釈における"actual business"である共同体建設のために移住した——のであり,Great Migrationが人類に対する神のerrandを持っていたと解釈するのはニューイングランドの起源を誤解させると主張する。そして安易にニューイングランドを十字軍的解釈や至福千年説へと結びつけることなく第一世代を理解すべきだと言う。

1980年代のピューリタニズム研究の特徴はそれまでのピューリタニズム研究のパラダイム——例えばMillerやBercovitchのとらえたAmerican Myth——に疑問を投げかけている点である。そしてwish-fulfillmentであったかも知れない概念を解説するのではなく,直接ピューリタンの内面に光を当て,ピューリタンの信仰と神との適切な関係を模索するのである。Delbancoは論文"Looking Homeward, Going Home,"の中で,アメリカに移住したが失望して英国に帰国したdefectorsであるHenry VaneやSamuel Eatonを描く。[13] 今まで注目されることのなかったニューイングランドの落伍者を扱うことにより,Delbancoはピューリタン社会の裏面を提示する。使命感に燃え

12) Theodore Dwight Bozeman, "Puritans' 'Errand into the Wilderness' Reconsidered," *The New England Quarterly* 59 (June, 1986), p. 231.

13) Andrew Delbanco, "Looking Homeward, Going Home: The Lure of England for the Founders of New England," *The New England Quarterly* 59 (September, 1986), pp. 358-386. この論文を含むDelbancoの著書は、*The Puritan Ordeal* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1989).

るピューリタンは本当のピューリタンの姿なのであろうか？ ピューリタンは anxiety, insecurity, doubt を感じなかったのか？ 神と自己との関係をピューリタンはどのように考えていたのか？ このような疑問は1980年代のピューリタニズム研究から出てきた新しい課題であると言えよう。

II

Francis Higginson は新世界を "fat blacke Earthe" と呼び, 空気は "extraordinarie cleere and dry Aire"[14] と描写し, その豊かさを賛美した。しかし移住者にとっては, 新世界は Bradford の言う "hidious desolate wilderness, full of wild beasts and wild men"[15] の描写の方により共感できたのではないだろうか。 Winthrop は妻に移住に際して最低12か月分の食料を持参するよう伝え, Higginson も同様な警告をしている。[16] アメリカ大陸で調達できるものは事実上木材だけであった。また Anderson は大洋航海は移住者の想像力を越えるものであったために, 大洋の波のうねりの描写に "mountaynes" "valleyes" "meadows"[17] などの陸上の風景描写の単語を使用していると指摘する。そして氷山を初めて見, 暴風雨の夜に船のしょう頭に現われる放電現象である St. Elmes fire (聖エルモの火) に驚くのである。[18] 人々は期待を抱いて新世界に移住するが, 物理的な新しい体験は彼らを secure にはしない。

またピューリタンは精神面においても強靱さを要求されたが, それを達成できたわけではなかった。Delbanco の描く "diffident" で "defensive" なピューリタンは初期の詩人 Thomas Tillam (?-c.1676) の "Upon the First Sight of New England" (1638) に表現される。[19] 詩の前半は新世界への期待を秘め, "Hayle holy-land" とアメリカを祝福する。

---

14) Francis Higginson, *New-Englands Plantation* in Perry Miller and Thomas H. Johnson ed., *The Puritans*, Vol. I (Harper Torchbook, 1963), pp. 123-124.
15) William Bradford, *History of Plimoth Plantation* in *Ibid.*, pp. 100-101.
16) Virginia DeJohn Anderson, *New England's Generation: The Great Migration and the Formation of Society and Culture in the Seventeenth Century* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1991), pp. 54-62.
17) *Ibid.*, p. 80.
18) *Ibid.*, p. 81.
19) Tillam は後に英国に戻ったため、植民地では defector と呼ばれた。

Hayle holy-land wherin our holy lord
hath planted his most true and holy word
Hayle Happye people who have dispossest
Your selves of friends, and meanes, to find some rest [20]

しかし後半になると“come”“posses”という注意を喚起する単語が使われ，命令形で激励調に変化する。

Come my deare little flocke, who for my sake
have lefte your Country, dearest friends, and goods
And hazarded your lives o'th raginge floods
Posses this Country; free from all anoye
Heare I'le bee with you,[21]

そして罠を仕掛けるサタンに注意せよ，安心してはならない，と警告する。“baites”や“lurk”するサタンに対し，saints に“beware”せよ，“fight”せよと言う。

But yet beware of Sathans wylye baites
Hee lurkes amongs yow, Cunningly hee waites
To Catch yow from mee; live not then secure
But fight 'gainst sinne, and let your lives be pure [21]

これらは新世界に希望を抱いても，決して secure になれなかった移住者の心情を示すものである。

1620年のプリマス植民地は宗教的な迫害で出国を余儀なくされた分離主義者により創設されたが，1630年のマサチューセッツ湾植民地は「自己の意志で」出国した会衆派主義者が創設する。Thomas Hooker (1586-1647) は信仰を忘れた英国の saints に警告を発し，英国での最後の説教“The Danger of

20) Thomas Tillam,“Upon the First Sight of New England,” in Heimert and Delbanco ed., *The Puritans in America,* p. 126.
21) *Ibid.*, p. 127.

Desertion" (1631) を行ない，アメリカに渡る。これは"Farewell Sermon"と呼ばれているが，事実「さらばイングランド」と言っているのは Hooker ではなく，「神」なのである。信仰を忘れた人々を神が「見捨てる」"dischurch or discharge"のである。"The Lord is said to dischurch or discharge a people, Hosea I : 9...and, as I may so say, he sues out a bill of divorcement, as it was in the old law."[22] そして去りゆく神と共に英国の栄光も去ると Hooker は警告する。

> Look to it, for God is going, and if he do go, then our glory goes also. ... *The glory is departed from Israel.* So glory is departed from England; for England hath seen her best days, and the reward of sin is coming on apace; for God is packing up of his Gospel....[23]

そして去りゆく神を町のはずれで止めよ，と Hooker は言う。

> Oh, therefore my brethren, lay hold on God, and let him not go out of your coasts. (He is going!) Look about you, I say, and stop him at the town's end, and let not thy God depart! Oh, England, lay siege about him by humble and hearty closing with him, and although he be going, he is not yet gone ![24]

Hooker の説教にみられるように，deliberate act of will として創始されたマサチューセッツ湾植民地は，その改革の意図を John Winthrop (1588－1649) の"A Model of Christian Charity" (1630) の中で明確に表明している。目的は "to improve our lives to do more service to the Lord"[25] と明言し，私的な利益よりも共同体社会の建設を優先するよう呼びかけ，"community," "company," "public," "together"などの単語が頻繁に使用される。[26] Bercovitch が Winthrop を「アメリカのネヘミア」と呼ぶ理由はこの点にあり，Winthrop

22) Thomas Hooker, "The Danger of Desertion," in *Ibid.*, p. 65.
23) *Ibid.*, p. 69.
24) *Ibid.*, p. 69.
25) John Winthrop, *A Model of Christian Charity* in *Ibid.*, p. 89.
26) *Ibid.*, p. 91.

も説教の中でネヘミアに言及している。[27] Winthropは神のgraceの下でsaintsが成長できる社会の城壁を作ることを目的とする。この枠組は有名な"under a due form of government both civil and ecclesiastical"[28] として表現されるが,これはWinthropがPerry Millerの言う"actual business"を重視する現実的な人間であったことを示している。

Winthrop sermonの特色は,ニューイングランドは神との契約を経て"due form of government"を形成すると解釈し,covenant of grace(恩恵の契約)を教会や国家に応用した点にある。

> Thus stands the cause between God and us. We are entered into covenant with him for this work. We have taken out a commission, the Lord hath given us leave to draw our own articles. We have professed to enterprise these actions; upon these and those ends, we have hereupon besought him of favor and blessing.[29]

covenant of graceは原罪を犯した人間を救済するために神が一方的に与えるpersonalでinwardな契約であるが,Winthropは社会はそのoutwardな結合であると考えた。[30]

III

covenant of graceはアメリカのピューリタニズムを特徴づける概念であり,Perry MillerがNew England Wayと呼び,John Cotton(1584-1652)が"the middle way"(SeparatismとPresbyterianismの中間点を意味する)と呼ぶCongregationalismの中心的概念である。この概念の意味づけは,AdamとEveは神からcovenant of works(業の契約)を守ることを条件に永遠にEden

27) *Ibid.*, p. 85.
28) *Ibid.*, p. 89.
29) *Ibid.*, p. 90.
30) Millerはマサチューセッツ湾植民地を"sanctified commonwealth"と呼び、移住者と神との契約により成立した社会であると述べている。Perry Miller, "Declension in a Bible Commonwealth," *Nature's Nation* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1967), p. 18.

に住むことを約束される（これは人間の自立の状態を示す）。しかし二人は原罪を犯して Eden から追放される。これを憐れんだ神はAdam の子孫を救済するため，Abraham と新しい契約 covenant of grace（恩恵の契約）を結ぶ。神は限られた少数の人間に covenant of grace を与え(Limited Atonement)，選ばれた人間 saints は神により支えられるようになる。covenant of grace は神から一方的に提供される契約であり，その返礼として神が要求するのは faith だけである。人間は信仰によってのみ救済されるため，これを「信仰による義認」"justification by faith alone"と呼ぶ。ピューリタニズムがカルヴィン主義と相違する点は神とこの covenant of grace を結ぶという点にあり，神と人間の間に契約概念を導入したことである。[31]

ピューリタニズムには TULIP (Total depravity, Unconditional election, Limited Atonement, Irresistible grace, and Perseverance of the saints) と要約される 5 つの大きな宗教概念がある。[32] この中でも covenant of grace を中心として，神から条件を一切付加せずに選ばれる Unconditional election と，選ばれた聖徒の側が決して反抗（あるいは要求）できない神の恩恵を示す Irresistible grace は特にピューリタンの契約神学を特徴づけている。Unconditional election は，grace は神からの無償の賜物 free gift であり，人間が道徳的行為をすることによりそれを稼ぐ "earn"ことはできず，また神は人間の努力に対して当然の報酬"wage"として報いるものではないことを示している。[33] そして election は神の自由な選択のもとに行なわれ，人間は自ら望むことも，拒絶する resist こともできない (Irresistible grace)。covenant of grace は人間が自分の努力や意志で天国へ行く保障を得ようとする無益さを示し，神の意志による saints への救済行為を強調するものである。

人間の意志と全能の神との間の力関係を示す作品は，John Cotton の"Wading

31) covenant of grace に関して優れた研究をしている歴史家は Michael McGiffert である。McGiffert によれば、神から grace を与えられた Children of God (saints) と一般の人々 People of God を選別する区分けは1580年頃から英国に登場し、説教のパターンに Hosea 書を引用することが多いと言う。Cf. Michael McGiffert, "God's Controversy with Jacobean England," *American Historical Review*, Vol. 88, No. 5 (December, 1983), pp.1151-1174. 特にp. 1163.

32) TULIP の概念は Synod of Dort (1618) でカルヴィン主義を確認したものといわれる。これはさらに Westminster Assembly (1643) で再確認される。

33) Robert Middlekauff, *The Mathers: Three Generations of Puritan Intellectuals, 1696-1728* (N.Y.: Oxford, 1971), pp. 167-168.

in Grace" (p.1654) である。covenant of grace の中で成長するキリスト教徒を浅瀬を行く人になぞらえた John Cotton は,川の水量で神の grace の大きさを暗示する。くるぶしまで水に浸る人間は意志通りに進めるが,膝まで水につかると人間の意志よりも神の存在が大きくなり,思うように進めないと言う。

> First a Christian wades in the rivers of God his grace up to the ankles, with some good frame of spirit; yet but weakly, for a man hath strength in his ankle bones...and yet may have but feeble knees....[34]

そして水の中を進むにつれ,傷は癒え,祈りは強まる。

> So farre as you walk in the waters, so far are you healed; why then in the next place, he must wade till he come to the knees, goe a thousand Cubits, a mile further, and get more strength to pray....[34]

そして身体すべてが神の grace に浸されると,人間は魚のように自由に泳ぐと Cotton は言う。

> But yet goe another thousand Cubits, and then you shall swimme; there is such a measure of grace in which a man may swimme as fish in the water, with all readinesse and dexterity, gliding an-end, as if he had water enough to swimme in; such a Christian doth not creep or walk, but he runs the wayes of Gods Commandements....[34]

神の絶対主権を認め,人間の堕落を強調する点ではピューリタニズムはカルヴィン主義的であるが,人間が持つ正義の概念を変えず,神が人間と covenant を結ぶという点において,カルヴィン主義と異なる。すなわち万能で自在の神が永続的な契約を提供する点において,本来ならば限定できない神を人間の観点から限定し,条件(conditionality)を加えるからである。この covenant

34) John Cotton,"Wading in Grace," in Perry Miller and Thomas Johnson ed., *The Puritans,* Vol. I. (N.Y.: Harper Torchbook, 1963), p. 318.

は平等な者の間の契約ではなく，promise，bargain などの神との平等を暗示する言葉はない。[35] しかし神が人間の所まで下りてきて契約を結ぶ (promise ではなく commit する)点で，神を合理化している。神は自らを"yoke"と"chain"にかけ，自ら絆 "bond" を結ぶのである。[36]

John Cotton と共に第一世代の大きな存在であった Thomas Hooker は Connecticut 植民地を創設し，William Hubbard をして"two eminent stars... could not well continue in the same orb"[37] と言わしめたが，内省を主題として心の中の sin と対峙した。Hooker は conversion のプロセスを"The Application of Redemption" (c.1640) で，具体的に解説する。Hooker は conversion を受け入れる心には，家の中に空気を入れる時のように"contrition"や"humiliation"がなくてはならないと言う。

> There must be contrition and humiliation before the Lord comes to take possession; the house must be aired and fitted before it comes to be inhabited, swept by brokenness and emptiness of spirit, before the Lord will come to set up his abode in it.[38]

この準備段階は土壌で言えば，"fit ground"であり，雑草を除いた後の鍬を入れる段階にすぎない，と Hooker は言う。

> As we say of ground before we cast in seed; there is two things to be attended there, it must be a fit ground, and a fat ground; the ground is fit when the weeds and green sward are plowed up, and the soil there, and made mold. And this is done in contrition and humiliation; then it must be a fat ground, the soil must have heart.[38]

---

35) Robert Middlekauff, *The Mathers*, p.318.

36) "He has placed Himself under a yoke." in Perry Miller, *NEM:SC*, p. 379. "He has become a God chained--by His own consent...." in Miller, *Errand*, p. 63. "I am willing to enter into Couenant with thee ... I will ingage my selfe, I will enter into bond ..." by John Preston, *New Covenant,or the Saints Portion* (London, 1629), p. 316 in Miller, *Errand*, p. 63, and Miller, *NEM:SC*, p. 380.

37) Quoted in Heimert and Delbanco ed., *The Puritans in America*, p. 176.

38) Thomas Hooker, *The Application of Redemption*, in Heimert and Delbanco ed., *The Puritans in America*, p. 177.

Hooker は土壌を"fat"にするためには heart や faith が必要だと言う。

> We say ground is plowed well, and lies well, but it's worn out, it's out of heart. Now faith fats the soil, furnisheth the soul with ability to fatten upon Christ, and so to receive the seed of the word, and the graces of sanctification, and thence it produceth good fruit in obedience.[38]

"fit ground"と"fat ground"の両方が準備されて初めて,種子を受け果実を結ぶことができると Hooker は言う。

しかしこのように達成された covenant of grace にピューリタンは安住できなかった。神は結局不可知な存在であり，絶対的な確信を持って突き詰めることはできないとピューリタンは感じ,カルヴィン主義へと回帰する。Thomas Shepard は最も "soul-ravishing"[39] な説教で有名であるが，同時に最も "anxiety-ridden"[40] な人間であり,assurance と anxiety の両面を生きた人物であると言われている。Shepard は説教で grace を解説しながらも,神は「無限に未知なる存在」"infinite unknown sweetness"[41] であると意識していた。

> I am not able to express the infinite unknown sweetness, and mercy, and presence of God, that you shall find thus coming. I know it is a common truth, but I am not ashamed to tell you, I have not for many a year understood this truth, and I see but little of it yet; ye have heard of it, but ye do not understand what it is to hear God speaking.[41]

常に存在する自己満足や自己欺瞞に用心していたShepardは,心の中のanxietyの基盤の上に grace の assurance を置いていた。

---

39) Samuel Eliot Morison,"Master Thomas Shepard,"in *Builders of the Bay Colony* (Boston: Houghton, 1930), p. 106, quoted both in Heimert and Delbanco ed., *The Puritans in America*, p. 33, and in Patricia Caldwell, *The Puritan Conversion Narrative: The Beginnings of American Expression* (N.Y.: Cambridge Univ. Press, 1983), p. 148.

40) *Ibid.*, p. 148.

41) Thomas Shepard, *Of Ineffectual Hearing, The Works of Thomas Shepard* ed. by John A. Albro (Boston, 1853; rpt. ed., N.Y.: AMS Press, 1967) 3: 381, quoted in Caldwell, *The Puritan Conversion Narrative*, p. 146.

すなわちアメリカのピューリタンが求めた救済は，それが一度 self-assure した時に意味したものは，彼らが求めた救済とは全く反対の insecurity だったのである。回心体験という transformation の後に来るのはそれを常に確信しようとする精神の "terrific struggle"[42] であった。この不安感と救済の確信の間で揺れたピューリタンを指して，Morgan は Caldwell の本の書評の中で，"The only way to be sure is to be unsure."[43] と述べている。また Bercovitch は"The great means to conquer this Uncertainty is Self-Examination."[44] と grace の持つ特徴を要約している。

イングランドにおける宗教の問題は Hooker の "The Danger of Desertion" に記される人々の心の中の「神の不在」であった。アメリカの初期のピューリタンの特色は「自己との対峙」であり，内なる罪との戦いであったと言えよう。しかしピューリタンは内省へ向うがゆえに自分自身の視点の虜になる危険性をも持つ。Shepardが1645年に"the churches are here in peace; the commonwealth in peace; the ministry in most sweet peace"[45] と述べたことを評して，Caldwell は Shepard を始めとする「橋の上」のピューリタン指導者は自己の視点の"prisoner"となり，橋の下に存在する一般大衆の問題とは無関係になっていると指摘する。[46] 一つの宗教に純粋になればなるほど，ピューリタンは社会の流れからかけ離れてしまう。Perry Miller は牧師たちは進歩の「結果」を嘆いたが，進歩自体は否定しなかったと述べている。[47] Caldwell の言う「橋の上」の指導者は社会が進歩していることを知っていても，どこに向っているのか理解できず，ピューリタンの伝統に忠実でありたいと願うのである。このような指導者の願望と大衆の関心との間の距離の拡大は New England がその目的に falter したということではなく，歴史は人々の予測通

42) William Haller, *The Rise of Puritanism* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania, 1938), p. 108.

43) Edmund Morgan,"Heaven Can't Wait," a review of *The Puritan Conversion Narrative* in *The New York Review of Books*, May 31, 1984, p. 33.

44) Richard Baxter, *The Saints Everlasting Rest* (London,1650), Part III, p. 137, quoted in Bercovitch, *The Puritan Origins*, p. 28.

45) Michael McGiffert ed., *God's Plot: The Paradoxes of Puritan Piety,, Being the Autobiography and Journal of Thomas Shepard*(Amherst: Univ. of Massachusetts Press, 1972), p. 9.

46) Caldwell, *The Puritan Conversion Narrative*, p. 116.

47) Perry Miller, *Nature's Nation*, p. 33.

りには進行せず，かつては main street にいた者も純粋でありたいと願うがゆえに取り残され，side track に押し退けられてしまうためである。ピューリタニズムではself-examinationや自己との対峙が大きな割合を占めるために，本来ならば信仰の福音を広めるべき assimilating な宗教がその厳格さのゆえに hope を失う潜在性を持つのである。

このinwardnessに加えて，アメリカのピューリタニズムはprecarious balanceにより支えられた宗教である。一方ではmoralityに励むことによりgraceを達成しようとする異端の Arminianism（アルミニウス主義）が存在し，他方で神へのpietyに依存して救済を願う他力本願の異端であるAntinomianism（反律法主義）が存在し，この両極端に陥らぬようにピューリタニズムは構築されている。すなわちピューリタニズムは「極端は異端となる」宗教であり，人間の側の道徳面の努力を認めつつ，救済は神の自由裁量(unconditional election) という福音部分を残す宗教である。こうした不安定な二面性の維持はピューリタンに多大な精神的重荷を強いたのではないだろうか。人間の側のmoralityと神からのunconditional electionの両方がgraceを確信するために必須条件であるにもかかわらず，一方を犠牲にして片方のみを追求すれば，異端となってしまう。さらに回心体験を通じて神の grace を感ずるとしても，その救済を絶対的に確信することは出来ず，ましてや永久に救済が保証されることもない。この精神的な insecurity を克服するために，ピューリタンは常に自己の信仰に立ち帰るのである。この矛盾を指してE. Brooks Holifieldは「Baptism は grace をもたらさないが，その手段と考えられ，sacrament は救済につながらないが，救済を促進する」と述べ，牧師自身もambidextrousであったと指摘する。[48] またこのようなparadoxicalな点に留意して，Edmund Morganはピューリタニズムの特徴は“uncertainty”の中に“certainty”を見いだそうとする点にあると言う。

Puritanism required a believer to find certainty in uncertainty, required

48) “Baptism did not convey saving grace, yet it was a means of grace. The sacrament could not save an infant, but it could facilitate the process of salvation.” in E. Brooks Holifield, *The Covenant Sealed* (New Haven: Yale Univ. Press, 1974), p. 48, quoted in David D. Hall, “On Common Ground: The Coherence of American Puritan Studies,” *William and Mary Quarterly*, 3rd Series, Vol. XLIV, No. 2 (April, 1987), p. 204.

him to rely for salvation on unmerited, predestined saving grace while spending a lifetime doing unrewarded good works, required him to search his soul for the Holy Spirit but denied him access to direct revelation, required him to be pure but told him he could not be.[49]

ピューリタンは報われぬ善行に励み，救済を願うのだが，救済はすでに予定されているのである。また"pure"でありたいと努力をしても，purity の確信を得ることはない。

このような parodox や ambidexterity は，救済を願う人間と，人間にとって究極的には不可解な存在である神との間に位置するギャップなのかも知れない。ピューリタニズムを解釈する際に，Bercovitch のように神に選ばれた共同体としてのアメリカの使命を前面に出すとすれば，saints として自信に満ちたピューリタン像や redepmtive America を描くことができよう。しかし私がこの Redeemer Nation として使命感に燃えるピューリタン像よりも Delbanco が描く思い悩むピューリタンや，新世界に疑問や不安を抱くピューリタン解釈の方に興味を持つ理由は，Delbanco の解釈の方が precarious balance の上に立つピューリタニズムにより近いのではないだろうかと感ずるからである。第一世代のピューリタンが感じた"a profound insecurity about their place"は単に物理的 place だけでなく，神と人間の精神的な place においても insecurity は存在したであろう。ピューリタン達は理想的な共同体建設の夢を持って新大陸に渡ってきたのかも知れない。しかしその約束の地 the Promised Land でピューリタンが体験したものは，Caldwell の言う"a strange, foggy limbo of broken promises"（奇妙な霧に包まれた破れた約束の辺土）であったかも知れない。[50] ピューリタンはその厳格な戒律のゆえに killjoy Puritan とよく呼ばれるが，そのような生活を存在せしめた彼らの心の中の葛藤や不安感にも光を当てる必要があるのではないだろうか。

（本稿は1992年10月17日 第31回日本アメリカ文学会全国大会において，「ピューリタニズムにおける grace と insecurity」という論題で発表した草稿を基礎とし，全面的に加筆したものである。）

49) Edmund Morgan,"Heaven Can't Wait," p. 34.
50) Caldwell, *The Puritan Conversion Narrative*, p. 134.